



辰巳小だより

江東区立辰巳小学校

校長 景山 賢治

学校だより第2号

令和8年4月30日

(ホームページアドレス) <http://tatsumi-sho.koto.ed.jp>

令和の時代にこそ大切にしたい「親しき仲にも礼儀あり」の心

副校長 鈴木 伸之

新緑が目に見え、鮮やかな季節となりました。保護者の皆様におかれましては、日頃より本校の教育活動に対し、多大なるご理解と温かいご協力を賜り、心より感謝申し上げます。新しい学年がスタートしてひと月が経ち、子どもたちも新しい環境に慣れ、教室には活気ある声が響いています。

さて、「親しき仲にも礼儀あり」という言葉を切り口に、これからの時代を生きる子どもたちに育みたい「心のかたち」について、皆様と考えてみたいと思います。

学校は、子どもたちが一日の大半を過ごす「小さな社会」です。毎日顔を合わせ、共に遊び、学び合う仲間たちは、時に家族にも似た親密な存在となります。しかし、心の距離が近くなればなるほど、私たちはつい相手への敬意を忘れがちになります。「これくらい言っても大丈夫だろう」「仲が良いんだから許してくれるはず」といった甘えが、無意識のうちに相手を傷つけ、取り返しのつかない溝を作ってしまうことも少なくありません。本来、「親しき仲にも礼儀あり」とは、単に形式的なマナーや行儀作法を指すものではありません。それは、「相手を自分とは異なる感情を持った一人の人間として尊重し、その心に土足で踏み込まない」という、思いやりの形なのです。親しい間柄だからこそ、あえて節度をもつ。その優しさこそが、長く続く良好な人間関係の土台となります。

この「礼儀」の第一歩であり、最も大切な実践が「あいさつ」です。「おはよう」「さようなら」「ありがとう」「ごめんなさい」。これらの言葉は、人と人をつなぐ潤滑油です。文部科学省が進める「令和の日本型教育」では、多様な背景や考え方もつ仲間と協力し、正解のない問いに立ち向かう「協動的な学び」が重視されています。自分とは異なる意見を持つ他者と手を取り合うには、まず互いの存在を認め合う対話が不可欠です。その対話の扉をひらく鍵こそが、明るいあいさつなのです。

また、一人一台端末の活用が進む現代、子どもたちのコミュニケーションはデジタルへと急速に広がっています。指先一つで言葉を送り合える便利さは素晴らしいものですが、画面越しのやり取りは、相手の表情や声のトーン、その場の空気感を読み取ることが困難です。そのため、対面であれば決して言わないような鋭い言葉が放たれてしまう危うさも孕んでいます。こうしたデジタル社会だからこそ、直接顔を合わせ、目を見て言葉を交わす「手触り感」のある交流が、かつてないほど重要になっています。相手の反応を肌で感じながら、ふさわしい言葉を選び、心を尽くして対話する。こうした実体験の積み重ねを通して、子どもたちは本当の意味での「親しさ」と、それを支える「礼儀」の意義を学んでいくのです。

教育は学校だけで完結するものではありません。子どもたちは、身近な大人の背中をよく見えています。私たち大人が、家族に対して、あるいは地域の方々に対して、丁寧な言葉遣いや礼儀正しい振る舞いを見せることが大切になってきます。「親しき仲」である家庭においてこそ、美しい言葉や敬意を大切にすること。その日常の積み重ねが、子どもたちの確かな品性と、他者を慈しむ心を育みます。

「親しさ」を単なる「馴れ合い」で終わらせず、互いを高め合う「信頼」へと昇華させる。そんな「礼儀」のあり方を、教職員一同、子どもたちと共に模索し、実践してまいります。今後とも、皆様の温かな見守りとご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。